令和7年度
「女性の多様なチャレンジに寄り添う学びと社会参画支援事業」（教員養成課程における男女共同参画学習の推進）
報告書

2026年3月

株式会社 リベルタス・コンサルティング

本事業の趣旨

- 男女共同参画は、日本政府の重要かつ確固たる方針であり、国際社会で共有されている規範である。我が国では、少子高齢化、Society5.0の実現を見据える中、女性活躍の推進は社会・経済の持続可能な発展のために重要である。
- 令和２年12月に閣議決定された「第５次男女共同参画基本計画」では、社会の多様性と活力を高め我が国経済が力強く発展していく観点や、男女間の実質的な機会の平等を担保する観点から、指導的地位への女性の参画の拡大が極めて重要とされ、「2030年代には、誰もが性別を意識することなく活躍でき、指導的地位にある人々の性別に偏りがないような社会となることを目指す」ことや、「そのための通過点として、2020年代の可能な限り早期に指導的地位に占める女性の割合が30%程度となるよう目指して取組を進める」ことが新しい目標として掲げられたところである。
- また、女性管理職の割合が依然として低い状況にある学校教育分野においても、女性のさらなる参画を推進するため、初等中等教育機関の教頭以上に占める女性の割合や大学の教員に占める女性の割合等について、2025年までの成果目標が示されている。
- 「女性活躍・男女共同参画の重点方針2024」（女性版骨太の方針2024）においては、これらの目標を達成するため、政府全体として強力に取組を進めることとしており、「未就学児がジェンダーバイアスにより自分の可能性を狭めてしまわないよう、幼児期の教育現場等における固定的な性別役割分担意識や無意識の思い込み（アンコンシャス・バイアス）の解消に 資する方策について調査研究を行う。」こととされている。
- これらを踏まえ、大学の教員養成課程における男女共同参画学習の充実のため、教職科目における男女共同参画関連科目の現状について調査研究を行う。

1．事業概要　（２）事業全体の枠組み①

■本事業の全体の枠組みは、下記の通り。

■本事業では、1. 調査票の作成と実施（①アンケート調査、②ヒアリング調査）、2. 報告書等の作成を行った。調査の実施に際しては、必要に応じ有識者からの助言を得た。



■教職課程・教員養成課程における男女共同参画関連科目※の現状について把握するため、下記の通り、WEBアンケートを実施した。

	概要
対象者	教職課程・教員養成課程を有する国公私立大学（短大含む） ※学部単位で設置しているため、回答は学部単位とする
調査方法	【配布】メール • WEBアンケートのURL・二次元コードを記載した調査依頼文書を作成。 • 文部科学省様より、対象大学の連絡先（メールアドレス）をご提供いただき、調査票をメールにて配布。大学の事務局から各学部へ配布していただく。 【回答・回収】WEBアンケート • 調査対象者は、説明資料に示されたURL・二次元コードよりWEBアンケート画面にアクセスし回答を行う。
回答結果	• 調査対象校は843校、うち599校から回収（回収率71.1%）

※男女共同参画に関する内容を主題としている科目

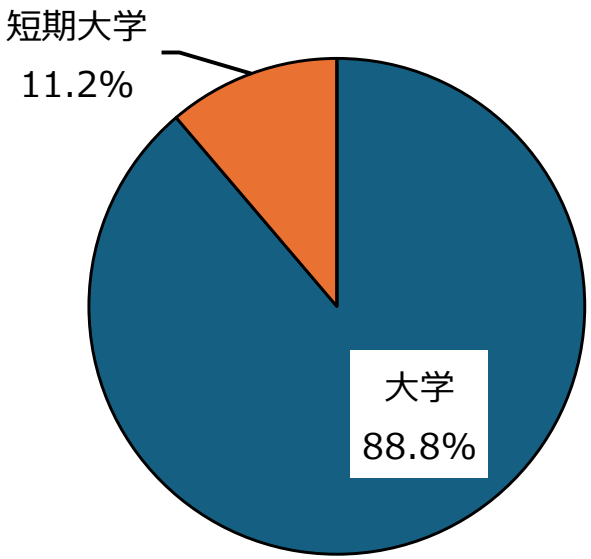
■さらに、下記の対象者にヒアリング調査を実施した。

	仕様
対象	• 教職課程・教員養成課程において男女共同参画学習を推進し、特色ある科目を開設している大学
実施件数	• 8件
対象抽出の視点	• アンケートに回答した大学のうち、「ヒアリング協力可能と回答」、かつ特色のある取組を行っている大学等 • 以下①～③の結果を考慮して抽出 ① 男女共同参画科目について特色ある科目を開設している大学等（問28 実際に授業で行われている特徴・工夫について の記載を確認） ② そのほか、自由記述（問29 教育効果・学生の反応、問30 男女共同参画科目に対するご意見 等）への記載が多い大学等 ③ 開設科目が多い大学等 ※設置区分（国公立・私立）、所在地域等を考慮しバランスよく抽出
調査方法	• オンラインヒアリングまたは書面ヒアリング

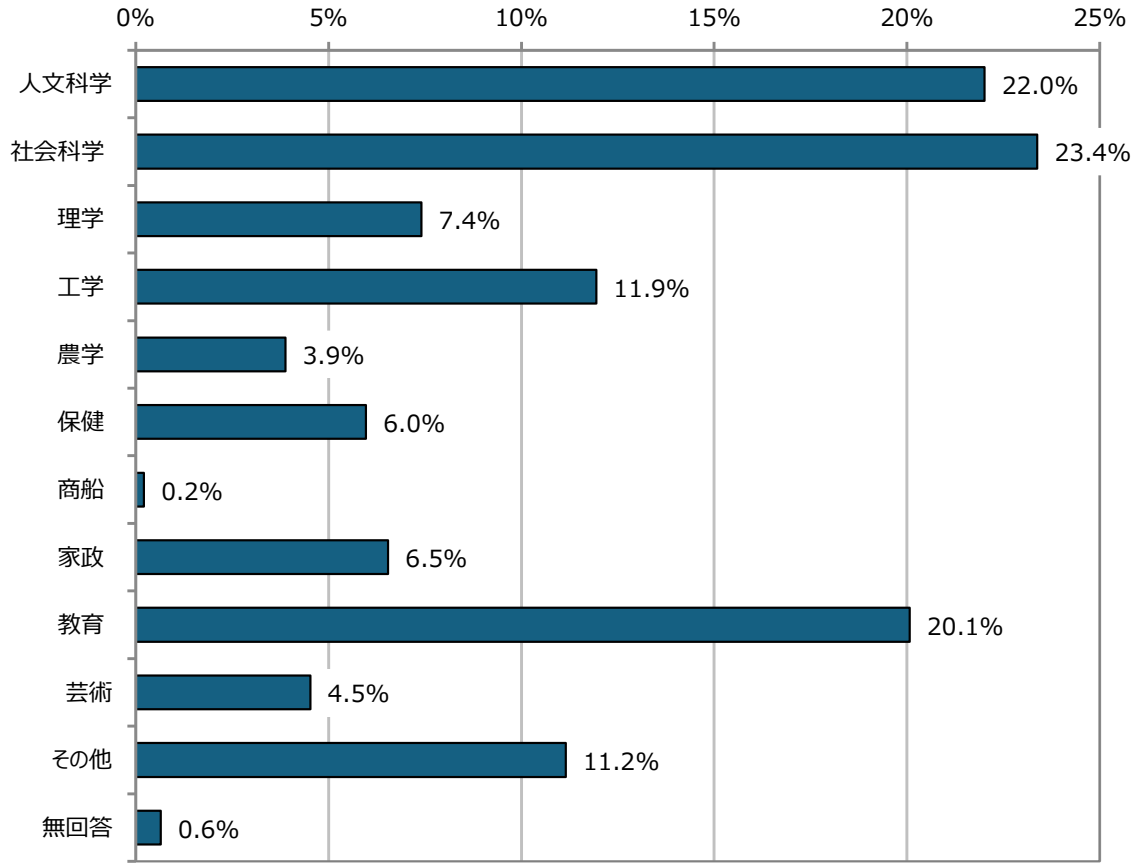
2．アンケート結果　①調査対象の属性

■学校種別、学部の分野は以下の通り。社会科学分野の学部からの回答が最も多く、次いで人文科学、教育系の学部からの回答が多い。

図表　学校種別（n=1,390）



図表　学部の分野（n=1,390）（複数回答）

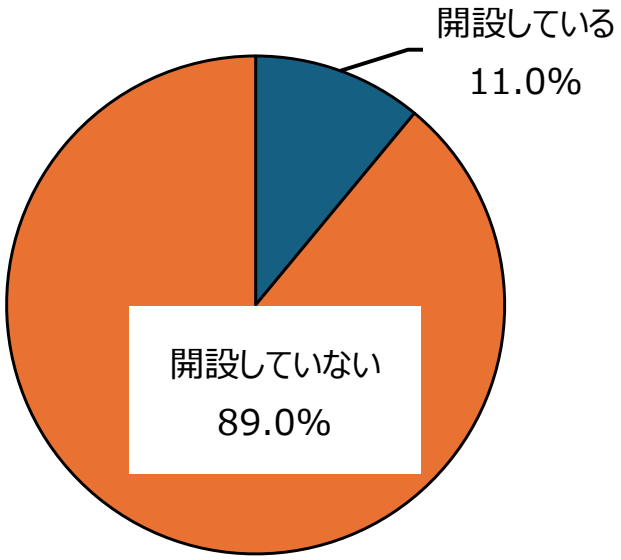


2．アンケート結果　②教職課程・教員養成課程における男女共同参画関連科目の開設状況

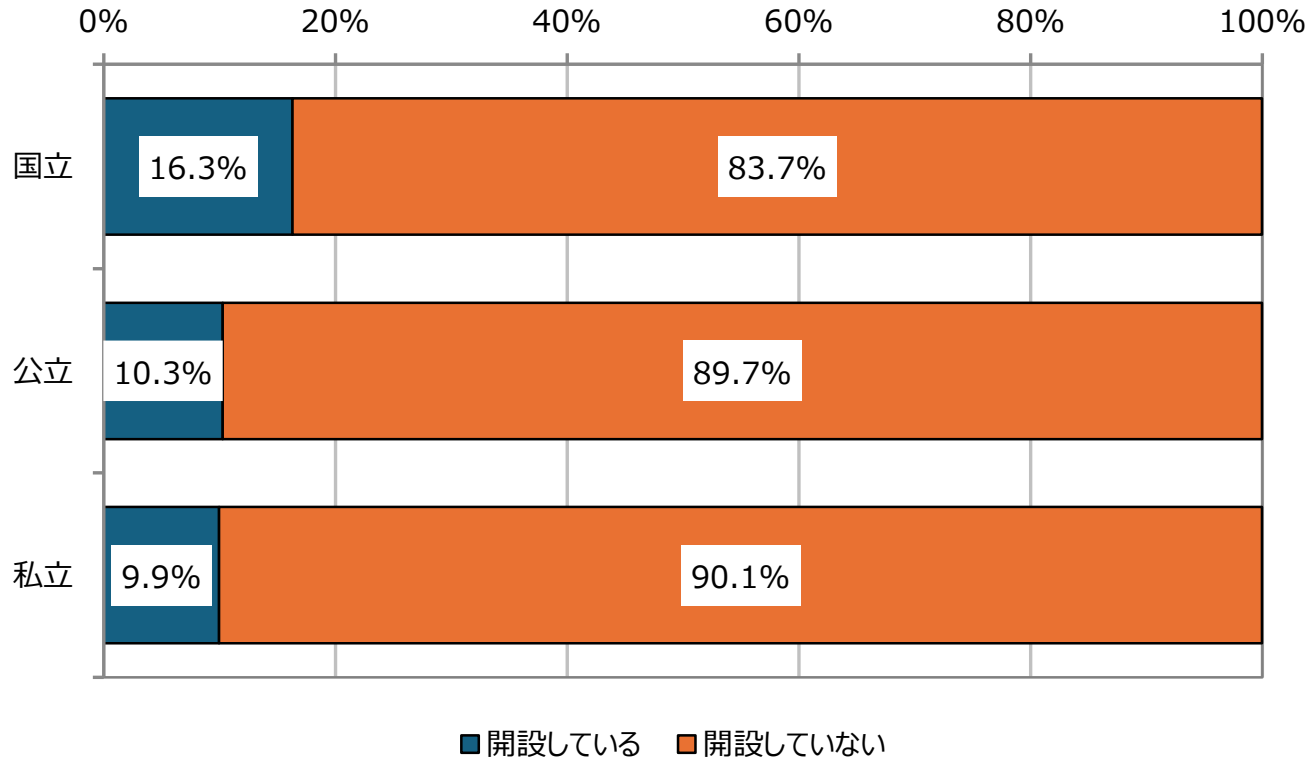
■R7年度の教職課程・教員養成課程における男女共同参画関連科目の開設状況について、「開設している」と回答した学部は1割弱にとどまった。

■設置主体別にみると、国立大学での実施率が他と比べるとやや高い。

図表　教職課程・教員養成課程における男女共同参画関連科目の開設状況（R7年度）（n=1,390）



図表　教職課程・教員養成課程における男女共同参画関連科目の開設状況（R7年度）（n=1,390）※学校設置主体別

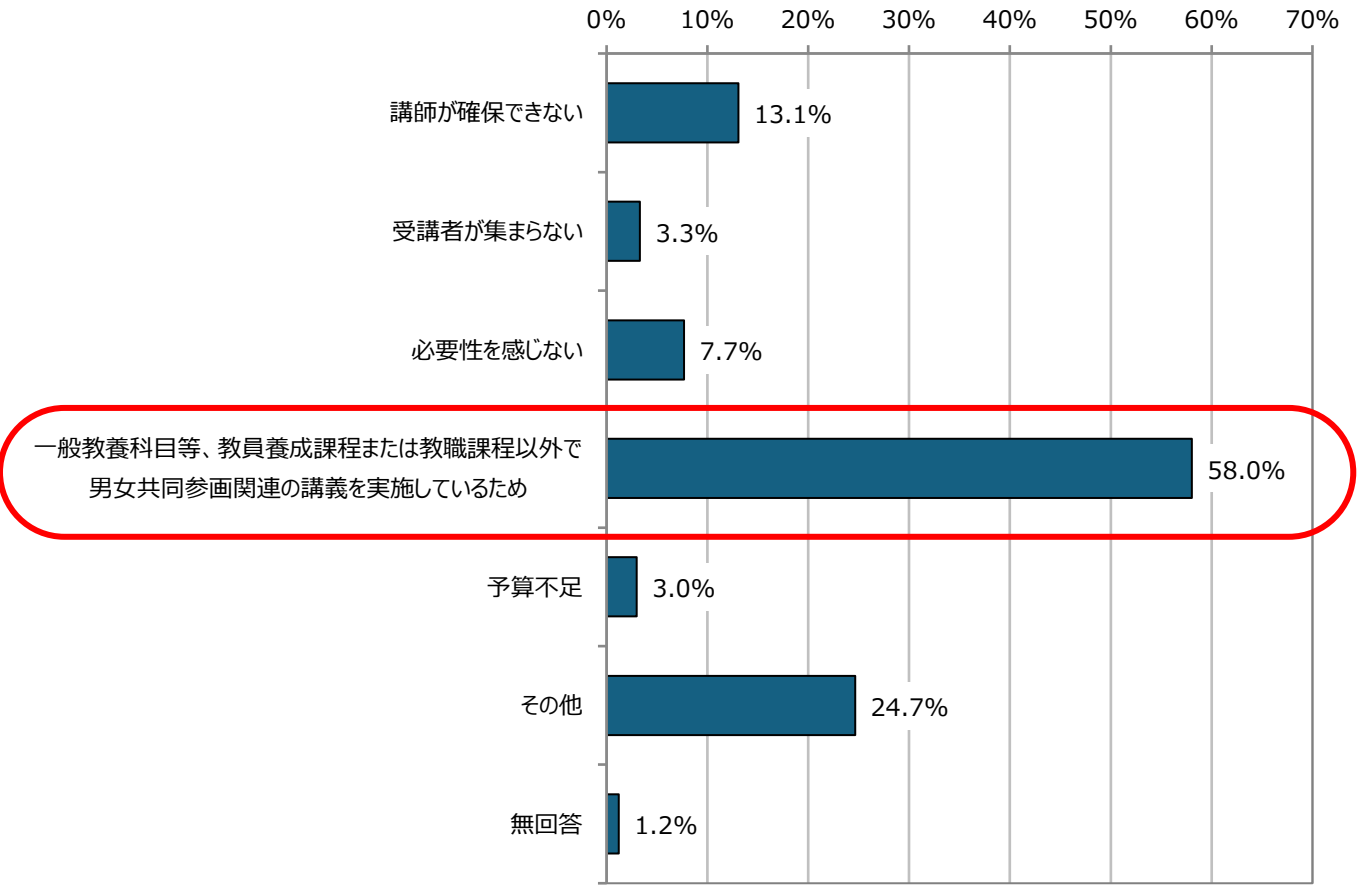


2．アンケート結果　③未開設の理由と今後の予定

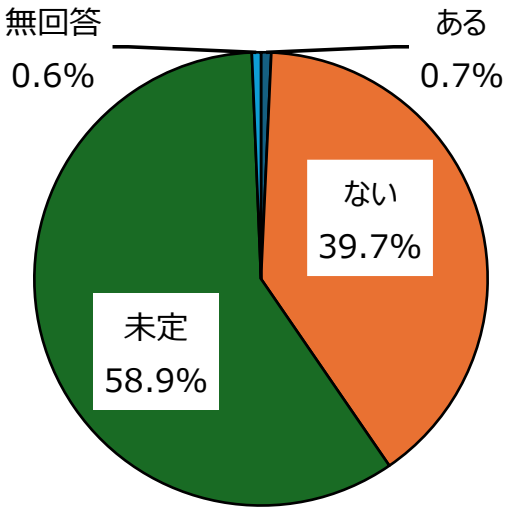
■未開設の理由としては、「一般教養科目等、教員養成課程または教職課程以外で男女共同参画関連の講義を実施しているため」（58.0%）が最も多かった。

■今後の開設予定については「未定」の回答が半数以上を占めた。

図表　未開設の理由（n=1,237）（複数回答）



図表　今後の開設予定（n=1,237）

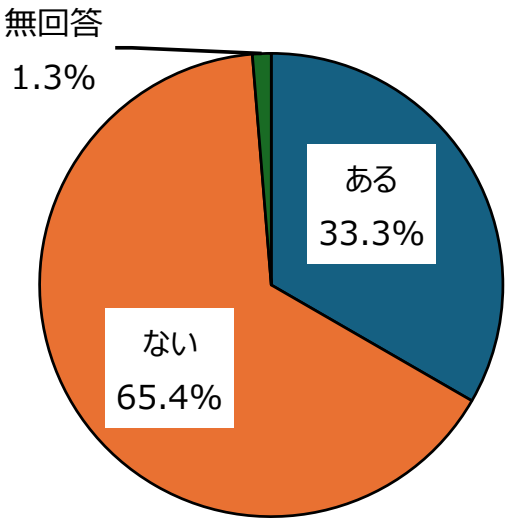


2．アンケート結果　④実施している男女共同参画関連科目の内容について

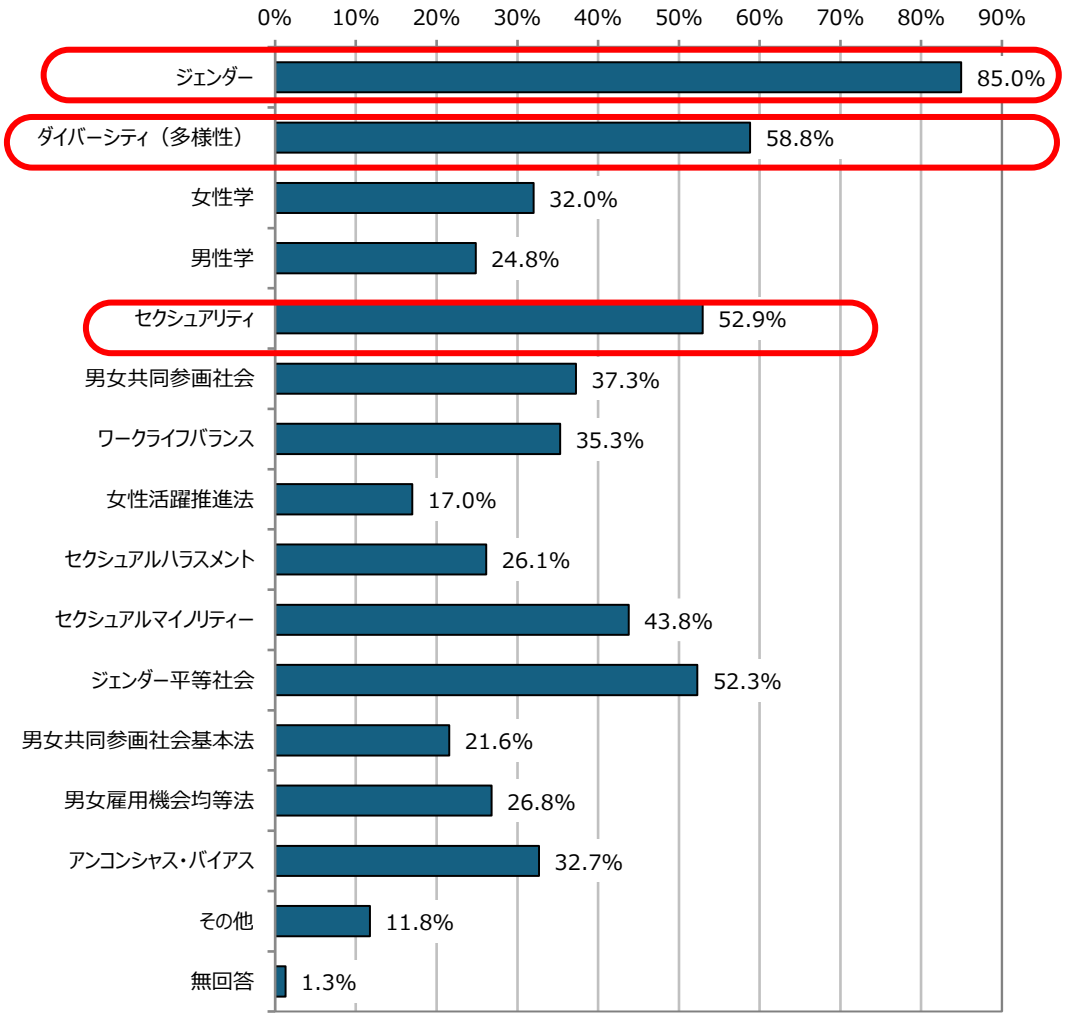
■男女共同参画科目を開設している学部のうち、必修科目を有する割合は全体の3割程度であった。

■科目の内容については、「ジェンダー」(85.0%)が最も多く、次いで「ダイバーシティ(多様性)」(58.8%)、「セクシュアリティ」(52.9%)と続く。

図表　必修科目の有無(n=153)



図表　開設している男女共同参画関連科目の内容(n=153)(複数回答)

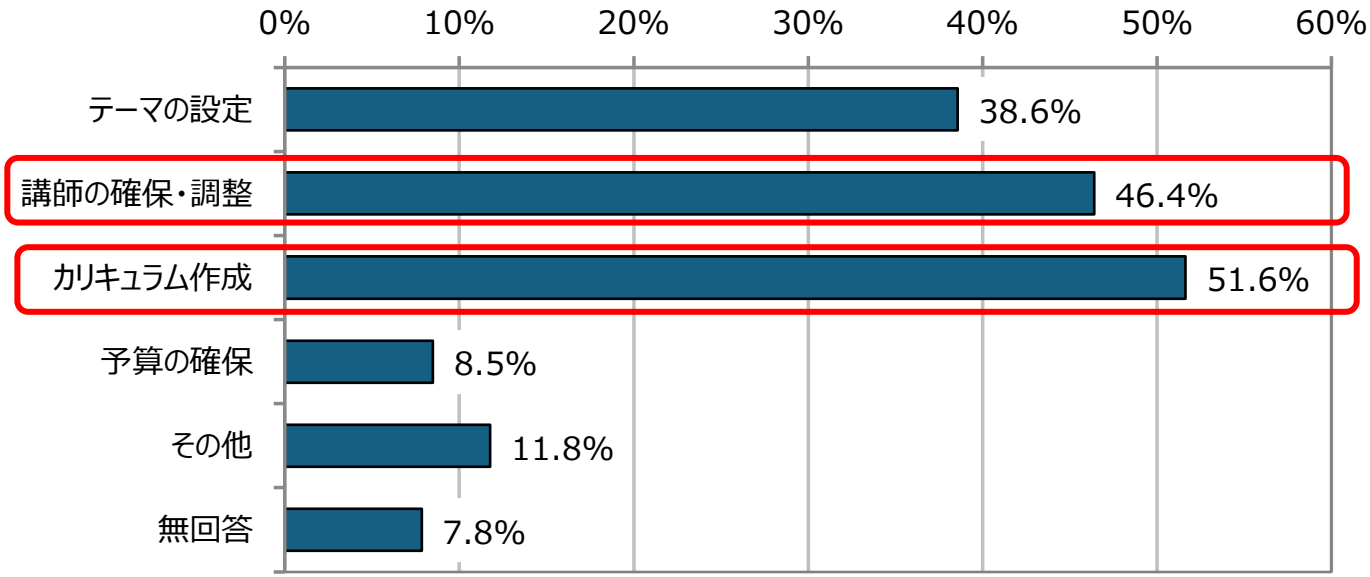


2．アンケート結果　⑤開設する上での課題

■「カリキュラム作成」（51.6%）、「講師の確保・調整」（46.4%）などの回答割合が高い。

⇒男女共同参画関連科目を開設するためには、現状を踏まえたカリキュラム作成と、対応できる講師の確保が必要であるため、この2項目が突出しているといえる。

図表　男女共同参画関連科目を開設する上での課題
（n=153）（複数回答）



2．アンケート結果　⑥-1 自由記述：教育効果・学生の反応（抜粋）

■教育効果・授業を受けている学生の反応について、「問題を『自分ごと』として感じられるようになった」、「ディスカッション等で気づきを得ている」等のコメントがあり、学生は高い関心を持って学んでいることがうかがえる。

図表　男女共同参画関連科目設置後の教育効果・授業を受けている学生の反応（自由記述）

学生の男女共同参画への意識が向上

- 学生は興味・関心を示して、授業を履修している。また、**これらの科目を履修し終えている学生の方が、**そうではない学生より、**ジェンダー問題に対する気づきや男女共同参画に対する意識の高まりがみられる。**
- 男女共同参画やジェンダー平等に関心を持ち、卒業論文のテーマとする学生が例年一定数いる。また、特に女性に対する暴力では、これまで被害に遭っていたにもかかわらず**授業を通して初めてその事実（自分や母親をはじめとした家族にふるわれているものが暴力であること）に気づいた**という反応はよく受け取る。その場合、**居住地の自治体の窓口などを紹介している。**

男女共同参画に関わる問題に気付き、「自分ごと」としてとらえられるようになった

- 科目設置後、受講を終えた学生からは、**「これまで『自分には関係ない』と思っていた問題が、『自分ごと』として感じられるようになった」**という声が多く寄せられている。また、授業内コメントにおいても、日常生活やメディア表現など、自身の身の回りにジェンダー課題を見出す記述が、回を追うごとに増えている。これらのことから、この科目の受講を通して**「男女共同参画」というテーマを自らの問題として捉える姿勢が育まれ、その視点を実践的に理解するという教育効果が着実に表れている**と感じている。
- 毎回の授業の感想からは、受講生の関心は非常に高い様子がうかがえる。授業を通して、自らのジェンダーバイアスに気づいたり、家庭で受けた教育やメディアのメッセージにおける固定的な男女の役割観を相対化したり、自分の過去の学校生活における隠れたカリキュラムの存在を再認識したりと、さまざまな気づきを得ているようだ。教員を目指す学生の中には、教員になったらジェンダー平等教育に取り組みたいという者も少なくない。**これからの男女共同参画社会の担い手となる学生の教育における本科目の効果は非常に大きい**と感じている。

2．アンケート結果　⑥-2 自由記述：男女共同参画関連科目についてのご意見（抜粋）

■男女共同参画関連科目についてご意見について、「男女共同参画科目を必修化してほしい」、「男女共同参画に関する知見と意識を持つことはすべての教員に必要である」といった意見が見られた。

教員養成課程または教職課程における男女共同参画関連科目についてご意見（自由記述 ）

男女共同参画への理解は全教員に必要

- 男女共同参画やジェンダーに関する知識と意識の醸成は、**教科を超えて、すべての教員に必要**と考える。教員養成課程においてはもちろんのこと、**現職教員においてもリカレント教育を定期的に行う**ことが求められる。
- 教員は、**将来の社会を担う子供たちの価値観を形成することに影響を与えるので、教員自身がジェンダー平等や多様性に対する深い理解を持つことが不可欠**です。そのため教職課程に男女共同参画関連科目を設置することは大きな意義があると考えます。
- 教員を目指す学生は、**社会の実情とその実情を男女共同参画の視点から考えることができるようになれば、生徒に対する気づき、声かけの仕方も変わる**と考える。

個々に応じた配慮が必要なケースもあり、授業運営が難しい側面もある

- 性的違和を抱える大学生も増えており、**必要な配慮やその程度が一人一人異なるため、授業運営が年々難しくなっている。**しかしながら、重要な社会課題であり、今後、さまざまな工夫を凝らして授業を続けていきたい。

コアカリキュラムとしての科目設定が望まれる

- 「教科に関する専門的事項」ではなく**「教育の基礎的理解に関する科目等」の必修（コアカリキュラム）として性に関わる人権を扱う科目の設定が必要**である。メインテーマが男女共同参画関連科目でなくても、**様々な科目で男女共同参画の推進に関する事柄、トピックで入れていってほしい**と思う。また、教育の分野での男女共同参画（例えば、学校ごとの校長の男女比など）について、都道府県版ジェンダーギャップ指数（共同通信社のウェブサイトにあります）の中にも取り上げられているので、そういった**都道府県ごとの教育分野での男女共同参画の現状も教職課程の授業の中で取り扱う内容として提示していってほしい**と思う。

4．ヒアリング事例

■アンケート結果をもとに、以下の8大学にヒアリングを実施した。対象校と、各大学の男女共同参画関連科目についての概要は、以下の通り。
※50音順　各情報は令和7年（2025年）度時点

■複数の男女共同参画関連科目を実施している場合は、代表的な科目を一つ掲載する。

	大学名（設置区分）	設置学部	科目名
1	愛知教育大学（国立）	教育学部	ジェンダー・セクシュアリティと教育
2	旭川市立大学（公立）	経済学部、保健福祉学部	異文化間教育
3	芦屋大学（私立）	臨床教育学部・経営教育学部	道徳教育の指導法
4	金沢大学（国立）	人間社会学域学校教育学類	ジェンダーと教育
5	高知大学（国立）	教育学部	男女共生社会論
6	大東文化大学（私立）	文学部、経済学部、外国語学部、法学部、経営学部、スポーツ・健康科学部	ダイバーシティと教育
7	玉川大学（私立）	教育学部	異文化理解と教育
8	文京学院大学（私立）	外国語学部	教育原理

4．ヒアリング事例

愛知教育大学：ジェンダー・セクシュアリティと教育　★選択科目　対象：1年生　受講者数：921名

- 愛知教育大学は令和3年度に教育学部を改組し、カリキュラムも新たに編成した。その際、「多様性の包摂について学ぶ機会を増やす」という大学の方針に沿って、ジェンダーや外国人児童・生徒支援等の現代的教育課題に対応する科目を新設した。その一環として本科目を令和3年度の1年生より開講した。
- 全8回の講義はそれぞれ独立したテーマによって編成されたオムニバス形式であり、教員4名（＋ゲスト講師）が講義を担当している。グループワーク等による受講者どうしの意見交換を円滑に行うため、全体を12クラスに分けて、講義を行う順番や時限をクラスごとに変えて実施している。8回の講義のうち1回は、性的マイノリティに関する啓発活動を行う特定非営利活動法人ASTAのメンバーをゲスト講師に招き講演を行っている。

令和7年度のテーマ・内容：①ジェンダー・セクシュアリティと差別・偏見②こども文化とジェンダー③学校文化とジェンダー
④セクシュアル・ハラスメント⑤愛と暴力⑥包括的性教育⑦性の多様性とジェンダー（ゲスト講義）⑧試験

例）「ジェンダー・セクシュアリティと差別・偏見」の回では、男女共同参画という観点から、人間の性格や能力等はジェンダーに紐づくものではなく、「一人ひとりが持つ特性」であることを理解し、ジェンダーについて差別や偏見をもたずに行動できる態度を育てることを目的としている。

例）「包括的性教育」の回では、国際的に展開されている包括的性教育について学び、人間が健康で安全に生きるために必要な知識や価値観を理解することを目指している。さらに、身体や心、性の健康に関して、若者が気軽に悩みを相談できる窓口「ユースクリニック」についても紹介した。

旭川市立大学：異文化間教育　★選択科目　対象：1～4年生（※令和8年度から2～4年生）　受講者数：7名

- 学校や日常生活におけるジェンダーに関する問題を取り上げ、異文化間教育的視点に結び付け、特に日常的な排除（マイクロアグレッション等）と社会構造に焦点を当てている。異なる立場の人たちに対し相手の背景を想像しながら理解しようとする姿勢や態度を育み、異文化間理解を教育実践につなげて考察できることを目指している。
- 授業の後には、授業に対するコメント（感想や意見、主張等）を記入したレスポンスペーパーの提出を課している。コメントへの返答で異なる視点を示唆する際、なるべく本人の感情を重視するよう心がけている。その理由は、履修生が子どもたちの感情を大切にできる教員になるためには、履修生が自身の感情を大切にされた経験を持つべきだと考えるからである。
- 学生負担を考えて、できるだけ新しい科目を設立することなく、既存教科の中でジェンダー及びセクシュアリティの問題に触れるようにしている。

授業テーマ例）「もし世界が100人の村だったら？」

日本を含め世界各国のジェンダー課題に触れながら、社会を批評的に見る姿勢や、物事をマクロとミクロそれぞれの視点で捉えることの重要性について説明した。

※ジェンダー課題の例：トイレの性別を示すマークについて、日本では男性用が青、女性用が赤というケースが多いが、スウェーデンでは同じ色であるケースが多いことを示したうえで、履修者に感想を求めたり、性同一性障害を持つ者が両国のマークを見たときの気持ちを推察させたりした。

4．ヒアリング事例

芦屋大学：道徳教育の指導法　★選択科目　対象：2～4年生　受講者数：58名

- ジェンダーの基礎知識を身につけるとともに、実例を挙げながら男女共同参画の必要性をグループワークで考えるようにしている（10人くらいのグループに分かれてディスカッションを行っている）。
- 授業の終わりにミニッツペーパーを提出し、毎回授業の最初に、前回授業の振り返りとミニッツペーパーの紹介をしている。
- 男女共同参画関連以外のテーマを取り扱う回でも、隠れたカリキュラムや教育史における男尊女卑の話など、男女共同参画社会に関係する話を端々に入れ、問題意識を醸成している。
- 毎回、学生に対し講義後にコメントシートの記入を課している。この講義では、「意見交換を通して他者の視点に気づき、他者理解や自己理解につながった」という旨の感想を得た。

主に性的指向や性同一性障害の話をする際、4つのテーマを与えている。
①同性愛者は治療が必要か、②LGBTの生活は快適かどうか、③不便と思う人はどういうところが不便か、④どのような性的思考の人でも快適に過ごすには何が必要か
といった問いかけをしている。

金沢大学：ジェンダーと教育　★選択科目　対象：1～4年生　受講者数：204名

- 金沢大学は1年を4つの期間に分けるクォーター制である。第3クォーター（10～11月）と4クォーター（12～2月）に同じ内容の授業があり、いずれかのクォーターを選び履修する。本科目は人間社会学域に限らず、他学域に属する学生の履修も可（ただし人間社会学域の学生が優先）。
- 授業ではジェンダー研究の成果を紹介すると共に、今まで当たり前と思われたジェンダー観、社会の在り方、慣習、批判、ならびに学校教育での活動に対し、学生が疑問や気づきを持つ機会、さらに社会で行われていることに限らず、自身の意識や考えを問い直すきっかけを与えることを目指している。

テーマ例）
・「ジェンダーをめぐる国内外の動向」では、教育に限らず社会全体における、ジェンダーをめぐる国内外の動向を学ぶ。具体的には、男女共同参画やジェンダーをめぐる社会の動向、女性差別撤廃条約、ジェンダーギャップ指数の概要等を取り上げ、他国と比較しながら日本の状況と課題を理解する。
・「カリキュラムとジェンダー」のテーマでは、顕在的カリキュラムの対義である「隠れたカリキュラム」について扱う。子供たちは“教えられる内容”のみならず、学校活動全体を通してジェンダー（社会的・文化的な性）を学び取る現状を、具体的事例や統計データ、研究知見と共に教える。例えば、男女別制服や男女別名簿等、担当などの慣習や教科書の内容、管理職割合に加え、教員と子どもたちのコミュニケーションにおける教師の言動やまなざしなどである。

4．ヒアリング事例

高知大学：男女共生社会論　★選択科目　対象：2～4年生　受講者数：28名

- 今後の日本の教育を担う可能性の高い教育学部の受講生に対して、現代の日本社会におけるジェンダー問題をより「自分事」と理解できるよう、また教育におけるジェンダー平等実現に向けて、日常生活の幅広い問題を扱う。家庭生活、地域社会、学校教育、経済、政治などをジェンダー視座から見ると何が課題かを共に考えていく。性の多様性、無意識の思い込みなどについても扱っている。
- 教科書に書いていることをまとめるのではなく、その内容を、いかに自分の生活や生き方と結びつけて考察したかを評価の1つにしている。また、講師が配付した文献以外の文献に自ら当たって論考を深めた場合も評価している。
- ジェンダーに関する新聞記事やネットで「炎上」を「自分ならどうするか」考えてもらう。

トピック例）：
「『疲れた。家事を手伝って欲しい』と頼む、オレより収入が低い妻に、オレは呆れている（笑）。『家事を手伝って欲しい』なんて、自分と同じくらい稼いでから言うセリフだろう」という趣旨の、「オレ」のつぶやきが炎上している、と受講生に教えてもらった。

⇒そこで、授業において、この「炎上」は何が「ポイント」なのか（なぜ支持する人と反対する人がいるのか）考えてもらった。

⇒この時は、女子学生は圧倒的に「オレ」に反対であった。しかし一部の男子学生や女子学生は、「オレ」の言い分に賛成した。そこで、「本授業を受けてきた中でどう思うか」と「自分が妻/夫だったらどう思うか」等グループで話してもらった。

大東文化大学：ダイバーシティと教育　★選択科目　対象：3～4年生　受講者数：25名

- 本科目は2名の教員で担当するオムニバス形式で、集中講義として夏休みの2日間にかけて実施している（令和7年度は7月30～31日）。対面で午前2時間、午後4時間程度。そのほかにレポート課題を出して15コマ分の授業になるようにしている。
- 基本的に教職課程履修者が対象だが、教職課程以外の学生も聴講可能であり、1年生から誰でも受講することができる（単位認定は3、4年生のみ）。社会人にも開かれているので、毎年小中高の養護教諭なども聴講生として受講しており、グループワークの際に、現場での経験等をお話しいただいている（学生の登録者数が25名で、聴講生が15名程度）。
- 多文化共生社会に向けての現代社会における様々な課題を扱い、その背景と解決に向けて多様な角度から学びを深め、講義と討論をバランスよく組み合わせ、主体的な学びを促進することを目的としている。
- 講義は、主にワークショップを取り入れ、グループディスカッション形式で進めている。

テーマについて（令和7年度）：
1日目は差別と人権にかかわる講義（①LGBTQs-多様な性②発達障害③共に生きる社会のために-人権と差別問題を考える）を実施。
2日目は女性の人権、主に性暴力についての講義（前半：社会正義アドボカシー・コンピテンシー（AC）、後半：性暴力を予防するバイスタンダー・アプローチ）を実施。

4．ヒアリング事例

玉川大学：異文化理解と教育　★選択科目　対象：2～4年生　受講者数：13名

- 子供の身近にある絵本、歌、教科書などに見られる、ジェンダーなどのステレオタイプ的な記述や写真などを題材に、いかに偏見の再生産のサイクルを断つことができるか検討していく。
- 子供達を取り巻く環境・メディアに埋め込まれているもの（当時の時代意識等）を分析する機会を授業の中で設けている（例：高級化粧品のモデル分析など）。子供を取り巻くメディアにどんな時代意識が埋め込まれているのか、「抜けている視点があるかもしれない」という意識を持って教材研究をしていける学生を育てる狙いがある。学生は、事前学修で分析した事例をPPTにまとめたものを発表し、議論を掘り下げる。
- 将来的には、自分の持っているステレオタイプを意識して教壇に立てる事が目的。実際の教育現場では、批判的に物事を見て、違う視点だったらどうなのか？と視点を変える事が、ジェンダーのみならず、マイノリティに対しても大切である、と考えている。

使用教材（英語教材）の例

・2000年代の検定教科書ができるまで（英語活動）の挿絵を見ると、Doctorに男性のイラスト、Living roomでは父親らしき男性と子どもがくつろぎ、Kitchenでは女性が料理をしている。

・2014年の検定教科書の挿絵：Cookに男性が料理をするものもあるが、Doctorは変わらず男性。子育てに関する依頼文では、子どもが母親らしき女性に食事や読み聞かせを頼む姿が描かれているものがある。

→子供は年齢が低いほど五感を通して学ぶので、教えたい情報以外にどういった情報が入ってくるのか議論する。

文京学院大学：教育原理　★必修科目　対象：1年生　受講者数：22名

- 全15回の授業は①性や家庭の歴史から教育を考える、②学校の歴史から教育を考える、③社会の歴史から教育を考える、の3つにパート分けしている。それぞれの観点から家庭や子供、学校、社会に関わる教育の歴史、思想を概観していくことを通して、多様な教育問題の山積する今日の教育現場に応用できる教育の原理を追究していくことを目的としている。
- 例えば①性や家庭の歴史から教育を考えるところでは、女性の社会的立場、女性がどのように近代教育に中で位置づけられ、どういう教育を受け、どういう変遷をしてきているかを学んでいる。
- ジェンダーや「らしさ」は社会的文化的基盤からも作られるが、家庭的背景で自分の男女の役割感が無意識に形成されるというのを、クイズ形式や話し合いで実感を持って進められるような工夫をしている。

問いかけの例）ジェンダー問題を扱う際、最初の授業では、以下のような問いかけを行っている。

「あなたが3歳以下の子供の親だとして幼稚園に入れたいか、保育園か、家庭教育がいいか（自分で教育をしたいか）」、「家庭を持ったとき誰が主に子供を育てるか、どうやって、どういう人たちで育てるべきか」

⇒お父さん、お母さん、祖父母、家政婦さんなど、色々な選択肢で選ばせて、どうしてそう思うのか話し合う。自分の経験に基づいて答えるため、父母が働いて祖父母に育てられていると祖父母を選択する傾向がある。

3．ヒアリング　①実施している男女共同参画科目の特徴・工夫点

■各大学の男女共同参画科目の特徴・工夫点について、授業ではグループワークやディスカッションを取り入れ、学生の中の無意識の思い込みを明らかにしたり、クイズや動画教材等、これまであまり男女共同参画関連学習になじみのない学生にも受け入れやすい授業にするための様々な工夫が見られた。

クイズの導入で無意識の思い込みを洗い出す

- 日常的な事例を題材にしたクイズを通して、ジェンダーに関する無意識の思い込み（男らしさ・女らしさ等）は、他人事ではなく自分自身にも内在する課題であることを学生に実感させた。
  ※例：ヒントから人物を特定するクイズで、「サッカーが得意な子」というヒントを提示すると、多くの学生が男の子と回答。しかし正解は女の子であることを伝え、学生に「サッカーが得意＝男の子」という無意識の思い込みを持っていることを実感させた。（愛知教育大学）

- 授業の最初にウォーミングアップでクイズを行い、自分のステレオタイプに気づく活動をする（スマートフォンで二次元コードを読み取り回答）。色々な回答を紹介してから、正解を発表する。
  ※例：グラハム・パイクおよびデイビッド・セルビー（1997）が紹介したクイズ→外科医＝男性と刷り込まれているため、外科医が母親である可能性を考慮できない→自分のステレオタイプに気づく。（玉川大学）

ディスカッション、グループワーク時のツールの工夫

- 講義は1クラス約70～80名の学生が参加しており、講義の時間に一人ひとりの意見を聴くことが困難である。そこで、学生が意見を発信し匿名で全員共有できるプレゼンテーションツール「Mentimeter（メンチメーター）」を利用し、学生が自分と異なる意見の存在に気づいたり、他者の意見から新しい観点を学べたりする機会を提供した。（愛知教育大学）

- 履修者が自分とは異なる他者の意見に触れられるよう、One noteやロイロノートを活用したディスカッションもしくは、グループワークを行っている。履修者どうしの自由な意見交換を重視し、担当教員はなるべく「見守る」ことを心がけている。また、教職課程としては学生負担を考えてできるだけ新しい科目を設立することなく、既存教科の中でジェンダー及びセクシュアリティの問題に触れるようにしている。（旭川市立大学）

3．ヒアリング　①実施している男女共同参画科目の特徴・工夫点

ディスカッションの実施方法・テーマについて

- 授業では、**実際の道徳科教科書を見ながら**内容に関する疑問や気づきについてディスカッションを行い、さらにグループに分かれ**教科書会社作成の授業案に関する改善点について検討**した。（金沢大学）
- グループワークについては、**いつも同じメンバーにならないように**、4人程度のチームで組んでいる。たとえ短時間でも、チーム内で**毎回全員が発表できるように**心がけている。（高知大学）
- マイクロアグレッションをテーマにした場合は、「あなたの友達が『買い物に行ったら、外国人がうるさくて迷惑だ』と言ったらどう感じるか」。ジェンダーがテーマの場合は、「女の人はなんだかんだ言って母性的だよね」「やっぱり男の子ってさっぱりしているよね」という発話について、**色分けしたカード（「問題ありそう：赤」「問題なさそう：青」「迷うところ：黄色」）を使い、こうした発話について問題点があるかどうかを話し合う。**（大東文化大学）
- 性暴力をなくすには個人だけでなく社会全体の認識が変化することが必要という観点から、**授業では身体と心を動かす、演劇的手法を用いている。**例えばDV被害者と支援者、関係者とのつながり方を**色の布を小道具として使いながら象徴的に表現し**、グループ同士で感想を述べあっている。いきなりこうしたワークをするのは難しいので、ウォーミングアップを必ず入れている。また、**性暴力は受講生の中にも被害者がいる可能性が高いという想定で、個人的経験を話す場をあまり作らないようにしている。**そのため、現状の概念や大事な考え方を紹介した後は、なるべくバイスタンダー、そうした場面を目撃したらどうするか、という支援者や居合わせた人の立場でのロールプレイを行う。（大東文化大学）
- **新聞記事や現代的な問題をトピックに扱うことで、理論的な内容に偏らないように配慮**している。ディスカッションを積極的に取り入れたり、一部映像資料を活用するなどの工夫を図っている。（文京学院大学）

動画教材の活用

- **文部科学省の「男女共同参画の推進に向けた教員研修モデルプログラム」の資料や動画**を視聴。（高知大学）
- 言葉だけで人権やジェンダーと言ってもなかなかピンとこないので、プリント類、PPT教材のほか、**授業では動画を必ず取り入れている。**人権啓発ビデオとして、「あなたがあなたらしく生きるために」という動画を見せている。動画を活用すると、現在ある問題についてより鮮明に気づかされるようだ。（芦屋大学）

3．ヒアリング　②学生からの意見

■昔と比べてここ数年は、学生がこのテーマを受け入れており、男子学生も積極的に学んでいる傾向であるという意見が見られた。また、実習等で現場に出た学生の中には、授業で学んだことと実際の学校現場でのギャップに困惑していたという課題も見受けられた。

- 性的同意を得る重要性について理解できたことを言及する者が多くいた。また、学校体験の際、異性の児童が安心できる身体的距離のとりかたについて質問する者もいた。一方、本人もしくは友人の性被害（DV、デートレイプ等）や、本人の性自認とそれに関する家族との関係について相談を受けることがあり、**教員間で情報を連携し相談窓口を紹介**したりする等の対応を行っている。（愛知教育大学）
- 学生からは「自分と異なる文化を持つ人と出会ったときのために、異文化間教育を学んでおいたほうが受容しやすくなる」「同じ感覚を持つ者だけで閉鎖的なコミュニティを築いてしまうと問題ではないか」「**他人の新しい価値観や考えに触れることで視野が広がり、柔軟な考え方ができるようになった**」「**自分の当たり前が全ての人の当たり前ではない**ことに気づいた」といった意見が出た。（旭川市立大学）
- **男子学生の方が活発な印象**を受ける。書面では女子学生もしっかりした意見を書いてくるが、みんなの前で発言するのは苦手な印象。また、やはり**女子学生の方が「女性が住みよい社会になればいい」という意見が多い**。（芦屋大学）
- **科目を開設した当初に比べ現在は、ジェンダーに柔軟な考えを示す学生が増えた**と感じる。男女混合名簿や男女統一呼称（全員に「さん」付け）等への賛成意見や、自身が受けた「隠れたカリキュラム」への不満をコメントに書く男子学生が増えた。不満の具体的内容は、男性のみに厳しい校則が適用されたことや、男性のみ上半身を裸にして水泳の授業を受けたこと等への嫌悪などである。（金沢大学）

3．ヒアリング　②学生からの意見

- **ここ10年で男性の履修者数が増加傾向**にある。「男性の生きづらさ」について語る男性の受講者がいるが、彼らは、それを全員の前で語ることは少ないように思うので、レポート等でいただいた声を大切にしている。（高知大学）
- 例えばマイクロアグレッションについては、自分は無自覚だった、自分はとらわれているつもりはなかったが、とらわれていたと気づいた、という意見が多い。また、**性暴力については、以前と比べ、被害者側に寄り添う意見が多くなった**。理由としては近年、不同意性交等罪が制定されたためで、**特に男子学生の反応は10年前と全然違う**。今は権力差のある関係ではNOと言えない、そこで応じたのは同意と言えない、ということに対し男子学生も理解するようになった。（大東文化大学）
- **多文化共生に興味を持った学生もおり**、直近3年間の卒論でジェンダーを取り上げた研究もある。「日本における女性の性的役割とメディアの関係」、保健体育専攻の学生では「サッカー界のブランディング戦略における現状と課題（男子リーグと女子リーグでの給与やサポートの比較）」がある。また、登場人物や描かれ方を研究する卒論には、「小学校国語科におけるジェンダーバイアス」や「アニメーションが子どもに与えるアンコンシャスバイアスの現状と課題」がある。（玉川大学）
- 学生からは、「授業を受けるまでは、無意識的にも家事や育児といえば母親をイメージしてしまっていたが、このような**無意識的前提が、自分達の息苦しさ（＝男らしくなければ、女らしくなければと言った考え方）に結び付いていた**ことがわかった」や、「**教員になった際は、積極的に男女が共に、対等な立場で協力しあうことの価値、大切さについて考える場をつくっていきたい**」等の反応が多くみられた。（文京学院大学）

3．ヒアリング　③課題、ご意見

■男女共同参画関連科目を実施する上での課題やご意見を以下にまとめた。

学校の男女共同参画体制構築への理解・サポート

- ジェンダーやセクシュアリティについて学生が身につけた新しい価値観を、**体験先もしくは赴任先の学校ならびに地域、保護者にも伝播させたい**。そのために必要な研修の実施やユースクリニックの運営を行うための**人員・予算のサポート**があれば、ありがたい。
- **当科目で学んだ内容と、体験活動で出向いた学校の現実が異なるため、迷ってしまい講師に相談する学生もいる**。その一例が児童の呼び方である。大学では「性差なく『さん』を付けて呼ぶ」と教わったが、学校の教諭が行う「男子に『くん』、女子に『ちゃん』を付けて呼ぶ」という状況がある。そのため**現職教諭が新しい価値観を得られるよう、研修やサポートを行う必要があると考える**。
- 子どもだから早すぎる、ということはなく、**男女共同参画社会に関するテーマについて学校教育でも積極的に伝えないと、子供の時に植えついた感覚はなかなか覆すことができない**。学校教育が課題。
- 性の多様性やジェンダー平等について、嫌悪意識をもつ教員もゼロではないと考えている。**学校現場の先生方との対話も必要**と感じている。（高知大学）
- 日本では学習指導要領が強固であり教科書検定も厳しいため、多くの教員は学習指導要領を厳格に守って授業を行っている。しかし**現在の学習指導要領には、ジェンダーやセクシュアリティ等、男女共同参画に関する記述が全くない**ため、**学ぶ必要性を感じても、学習で取り上げる教員は少ない**。そのため、**学習指導要領に上記に関する記載が加わることが望ましいと考える。**

3．ヒアリング　③課題、ご意見

国へのご意見

- こうした科目は**必修化すべき**だと考える。そもそも教育の本質の一部は、**児童・生徒が、多様な背景をもつ他者との関わりからよりよく生きることを考察し、それを実践すること**にある。ただ、昨今の状況を鑑みると、学生が教職課程を履修する際の負担軽減を優先しているため、実現可能性は低いのではないかと予測している。
- 視覚的な教材が学生に非常に効果があると日々感じるので、**イラスト形式の教材をもっと作ってもらえるとよい**。また、そうした教材についての案内を文部科学省からもしてもらえるとありがたい。
- 教育予算拡充や福祉の予算に行政的な措置等による、**若者が学びやすい環境づくりが第一。同時に小中高の現場の教員数を増やさないといけない**。理念を訴えるより教育や福祉にかかわる骨格の財源をしっかり確保することを求めたい。その上で**差別に抗う教育を並行して進めていく必要がある**。
- 男女共同参画科目の推進は、国の指示待ちではなく、**大学が主体的に進めていくべきこと**だと思っている。そのため、国には大学の自治、大学がやりたいと思っていることを信用して自由にやらせてほしいし、そうした取り組みを評価してほしい。
- 男女共同参画社会の推進には、文部科学省でも部局、課を超えての連携が大切であるので、各部局、課同士の連携を引き続き図っていただきたい。**今回の課題は初等中等教育の授業を改善することとも連動している**ため、今回の調査の成果を省内でも広く周知いただきたい。
- アクティブラーニングは文科省の教職課程の考え方としても推奨されているところではあるが、教職課程のコアカリキュラムで求められている内容を満たすことで時間を要し、アクティブラーニングを取り入れるための十分な時間を確保できないというのが実情である。新しい取組が反映できるよう、さらに継続検討や改訂が必要ではないかと考える。
  また、本学の学部のような開放性の教員養成制度の場合は特に、学生が時間の確保に苦慮している様子が見受けられる。それが、最終的に所要単位を全て履修できずに途中リタイヤする学生が多く発生する結果となっており、**もう少し時間のゆとりが必要**と考えられる。**本当に教員にとって大事な資質を育てるのに今の所要単位や制度が合っているのか、継続して討議、確認していくことが必要**と考える。

4．まとめ　（１）アンケート・ヒアリング結果からみる現状と課題

■アンケートやヒアリング結果から判明した現状と課題については下記の通り。

教職課程・教員養成課程における男女共同参画関連科目実施率の現状と課題

- 教職課程・教員養成課程における男女共同参画関連科目の実施率は全体の1割程度であった。
- 未実施の理由の大半が「一般教養科目等、教員養成課程または教職課程以外で男女共同参画関連の講義を実施しているため」を選択していることから、**教職課程・教員養成課程において、教師を目指す学生が男女共同参画科目を学ぶことへの重要性を大学・学生に周知する必要がある。**

カリキュラム作成のサポート等について支援体制整備が必要

- カリキュラムの作成について課題としている大学が多くあった。カリキュラムや、使用する教材については**文部科学省からもHP等で助言、推薦教材を広く周知、提示するなどのサポートがあるとより取り組みやすい**のではないか。
- 男女共同参画科目について、現在担当する教員の退官した後が未定であるというケースも見られた。**継続的に実施できるよう、担当教員の配置、カリキュラム等の整備が望まれる。**

広い視野を持つ学生を育成

- ヒアリングを実施した複数の大学から、昨今の学生はSNS等の影響もあり「自分の好きなもの」だけ見ていて、それ以外は知らない（視野・経験を広げていない）傾向があるという意見があった。**大学の授業を通じて視野を広げ、公平・公正な目線を持つようにすることが必要になる。**
- しかし、教職課程・教員養成課程を履修する学生は、**履修科目数が多く、新しい科目を取る余裕がないケースが多い。**そこで、**既存の科目で男女共同参画のテーマについて扱うとよい、実際に扱っている**、という声があった。